

## 故郷での修行の始まり 白上遺跡しらかみ

16歳になった明恵上人は、東大寺で上覚について正式に出家しました。研鑽けんさんを積み重ねた上人は、神護寺においても東大寺においても将来を嘱望される存在となりました。しかし、名誉や利欲を求めて争う周りの僧たちの姿に失望し、建久6年（1195年）、23歳の秋に神護寺を出て、本尊と経典を背負って故郷の有田の地へと向かいました。

故郷における最初の修行地となったのが、祖父の湯浅宗重が開発を進めていた湯浅の町に近い白上峰（湯浅町栖原すはら）でした。それ以後、上人は30代前半までの約10年を、故郷を拠点として過ごすこととなります。

明恵上人は、湯浅湾に面した白上峰の大きな岩



西白上遺跡

の上に草庵そうあんを建て、寝食を忘れて修行に没頭します。現在この場所は、西白上遺跡として国の史跡に指定されています。現地は、眼下に海を臨む岩場の端にあり、インドの方向となる西に向かって開けており、上人が眺めた風景に思いをはせることができます。

明恵上人は、ほどなくして修行の場所を西白上遺跡から東の峰に移します。建久7年（1196年）、厳しい修行に思いが極まった上人は、捨身しゃしんの覚悟を決め、仏道に身をささげる決意を表すために、母として慕った「仏眼仏母像ぶつげんぶつもぞう」という絵の前で右耳を切ります。捨身とは、自らの身体を施す自己犠牲の修行法で、釈迦しやかが前世において飢えた虎の親子のために自身の身体を与え、飢えから救ったという話は有名です。釈迦を思い続けていた上人は、少年の頃から捨身の思いを募らせていました。

耳を切った夜には、痛みをこらえて華嚴経を読む人の前に、金色に輝く獅子に乗った文殊菩薩もんじゅぼさつが現れた夢を見たと言われます。耳を切るという重大な事績を物語る場所は、西白上遺跡から400m程東に行った山中にあり、現在は東白上遺跡として国の史跡に指定されています。



東白上遺跡